

TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo University of Marine Science and Technology (東京海洋大学)

## 口語英語における連結詞脱落に課せられた制約

著者	藤 正明
雑誌名	東京海洋大学研究報告
巻	16
ページ	53-63
発行年	2020-02-28
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1342/00001837/">http://id.nii.ac.jp/1342/00001837/</a>

[論文]

# 口語英語における連結詞脱落に課せられた制約

藤 正明\*

(Accepted November 18, 2019)

## Constraints on Copula Drop in Spoken English

Masaaki FUJI\*

**Abstract:** In spoken English, finite copulas at a sentence-medial position tend to be dropped. This phenomenon is usually considered to be due to communicative pressure for brevity. This article shows that there are formal constraints on the copula drop to the effect that communicative succinctness is undermined. More concretely, the main purpose of this article is to argue that the distribution of sentence-medial finite copulas in spoken English is regulated by at least two types of syntactic constraint, one being concerned with the subject and the other concerned with the predicate. Further possibilities are discussed to derive these constraints from more general principles.

**Key words:** spoken English, sentence-medial copula drop, abbreviated register, dynamic model of grammar, SMCP

### 第1章 はじめに

よく知られているように、英語の標準的な文法規則では、空所化 (gapping) 構文 (cf. 1f) を除き、文中に生じた時制を担う連結詞 (sentence-medial finite copula) を脱落させることは許されない。(以下、*ec* は時制を担う連結詞などの機能語が脱落している場所を示している。) <sup>1)</sup>

- (1)
  - a. The morning star [*is/\*ec*] [<sub>NP</sub> the evening star]].
  - b. The building [*is/\*ec*] [<sub>AP</sub> taller than the U.S. Capitol]].
  - c. Your service [*is/\*ec*] [<sub>VP<sub>Pen</sub></sub> suspended for non-payment]].
  - d. A girl [*is/\*ec*] [<sub>VP<sub>ing</sub></sub> reading her favorite book]].
  - e. Our cat [*is/\*ec*] [<sub>PP</sub> in the kitchen]].
  - f. John is a doctor, and his sister [*is/ec*] a lawyer.

しかし、短縮レジスター (abbreviated register) と呼ばれる特殊な文法使用時には、そのような定形の連結詞が脱落していることもまれではない。例えば、短縮レジスターの一つである新聞ヘッドラインの例を観察してみよう。(新聞ヘッドライン及び電報を例文として提示する際には、全文を大文字で表記することとする。) <sup>2)</sup>

- (2)
  - a. HUSKIES [*ec*] [<sub>AP</sub> DOMINANT INSIDE AND OUT]]  
(=The Huskies were (recently) dominant inside and out.)  
(Paesani 2006:148)
  - b. JUDGE [*ec*] [<sub>VP<sub>Pen</sub></sub> FOUND SLEEPING WITH CALL GIRL]]  
(= A judge was (recently) found sleeping with a call girl.)  
(Schütze 1997:199)
  - c. REAGAN [*ec*] [<sub>VP<sub>ing</sub></sub> SUFFERING FROM ALZHEIMER'S]]

- (=Reagan is suffering from Alzheimer's.)  
(Schütze 1997:205)
- d. PUTIN [*ec*] [<sub>PP</sub> IN BULGARIA THIS WEEK]]  
(= Putin is in Bulgaria this week.) (Stowell 2007)

(1)に挙げた標準英語の場合とは異なり、(2)の各例文は、定形の連結詞が脱落しているにもかかわらず、新聞ヘッドラインとしてごく自然なものとなっている。

本研究の目的は、口語英語 (spoken English) に見られる連結詞脱落に2種類の文法制約が課せられていることを示すことである。その際、英語母語話者の容認度判断に加えて、口語海事英語の用例集である *Standard Marine Communication Phrases* (SMCP) の分析も行い、資料として利用する。

この論文の構成は以下の通りである。第2章ではレジスター および短縮レジスターの定義を行う。第3章では、本研究で使用する2種類の言語資料を導入する。第4章では、口語英語の定形の連結詞がどのような場合に脱落が許されないのかを考察し、2種類の統語制約を提案する。第5章ではまとめを行うとともに、2種類の統語制約をそれぞれより一般的な原理から導出する可能性を探る。

### 第2章 レジスター変異

#### 2.1. レジスターとは何か

最初に、言語学においてレジスター (register) という概念がどのような意味で用いられてきたのかを簡単に見ておこう。

言語における変異が多岐にわたることは言うまでもないが、そのような変異の中には、一般的にレジスターと呼ばれている種類の変異が存在していることが、これまで多

\* Department of Maritime Systems Engineering, Tokyo University of Marine Science and Technology (TUMSAT), 2-1-6 Etchujima, Koto-ku, Tokyo 135-8533, Japan (東京海洋大学学術研究院海事システム工学部門)

くの言語学者によって繰り返し主張されてきた。しかし、各言語学者が採用しているレジスターの定義を検討してみると、どの定義にも共通点はあるものの、他とは異なる用語の組み合わせが使われていたり、また、使用されている用語の意味が必ずしも明確ではないため、それらの定義が同一の範囲の言語現象を指定しているのかどうか判然としない。

先行研究におけるレジスター定義の例として、以下の社会言語学的な立場からの定義を比較されたい。(以下、原著から省略した部分は[...]とした。)

- (3)
- a. [...] register is used as a cover term for any variety associated with particular situational contexts or purposes. (Biber 1995:1)
  - b. Generally speaking, registers are sets of language items associated with discrete occupational or social groups. (Wardhaugh 2015:53)
  - c. The concept of register is typically concerned with variation in language conditioned by uses rather than users and involves consideration of the situation or context of use, the purpose, subject matter, and content of the message, and the relationship between participants. (Romaine 2000:21)
  - d. Linguistic varieties that are linked [...] to particular occupations or topics can be termed *registers*. [...] Registers are usually characterized entirely, or almost so, by vocabulary differences: either by the use of particular words, or by the use of words in a particular sense. (Trudgill 2000:81, italics original)

このように多様な定義が混在している状況ではあるものの、これらの定義が捉えようとしている共通の属性が存在していると考えられる。それは、レジスター変異は、方言変異とは異なり、一人の母語話者が特定の言語使用の場面ごとに示す変異だということである。ここで、一つのレジスターには一つの文法が対応していると仮定してみよう。もちろん、このように仮定すれば、一人の母語話者が複数の文法を同時に持っていることになるわけであるから、そのような複数の文法は、互いに、ほぼ共通の規則から構成されているはずである。しかし、特定の場面ではそのような文法集合の中から、その場面に相応しい規則を持った文法が選ばれ、使用されるとしてみよう。

以上のように仮定すると、生物言語学的観点から、レジスターは(4)のように比較的単純に定義することができる。

#### (4) レジスターの定義

特定の母語話者が異なる言語使用の場面で使い分けている、互いに部分的に異なる文法の集合 (a set of partially distinct grammars that a particular native speaker puts to use depending on different linguistic contexts of use)

この定義で問題となると思われるのは、成人の母語話者が互いに少しずつ異なる複数の文法を同時に保持しているという仮説であろう。実は、このような仮説を明示的に組み込んだ文法理論を構築しようとする動きがすでに存在する。

そのような理論の一つに、Roeper (1999, 2016) などが提案している多重文法 (Multiple Grammars) 理論がある。多重文法理論では、一人の母語話者の脳内に複数の異なる文法が同時に存在し、相互に影響を及ぼしあっていると仮定している。Roeper は第2言語習得に関わる問題を中心的に

扱っているが、Roeper (1999) では、レジスター変異に関して、多重文法理論による解明の可能性も提示している。

例えば、Roeper (1999) によると、英語では、通常、主文の定形動詞の主語脱落は許されないが、インフォーマルなレジスターでは、虚辞の *it* の脱落が許される。

- (5)
- a. {It/ec} seems like a good idea.
  - b. {It/ec} looks good to me.

(Roeper 1999:173)

この現象に対して、多重文法理論では、特定のレジスターに限り、英語の文法内に主語脱落を認めるイタリア語のような文法が関わっていると考える。つまり、英語母語話者は通常の文法と主語脱落を許す文法とを同時に持っていることになる。<sup>3)</sup>

また、Jackendoff and Wittenberg (2014) は、母語話者の言語知識が、単純な文法から複雑な文法までを連続体として持つ文法階層、言い換えると、一種のパリンプセスト (palimpsest) からできていると主張している。<sup>4)</sup>

- (6)
- To the degree that various points on the hierarchy are found to be actually instantiated, we will be able to make an empirical claim about the human language faculty: it is not a monolithic block of knowledge, but rather a palimpsest, consisting of layers of different degrees of complexity, in which various grammatical phenomena fall into different layers [...]. (Jackendoff and Wittenberg 2014:67)

大人の母語話者が内蔵している文法が多階層をなしていることを示す証拠の一つとして、Jackendoff and Wittenberg (2014) は、大人の英語母語話者による特殊な連結詞脱落現象を挙げている。

- (7)
- a. Everyone {is/ec} out of the car!
  - b. John {is/ec} at a baseball game?! (I can't believe it!)
  - c. No dogs {are/ec} allowed.
  - d. Refreshments {are/ec} in the kitchen.
- (Jackendoff and Wittenberg 2014:75)

上記(7)の例は、連結詞が脱落していたとしても、適切な場面で使用すれば、すべて容認可能である。これは、大人の英語母語話者が、連結詞脱落を許さない標準的の英文法とそれを許すより単純な文法の両方を同時に持っているということを示していると考えられる。

以上のように、成人の母語話者が複数の文法を同時に保持しているとする仮説を支持する証拠が集積されつつある。そこで、本研究では、このような先行研究を踏まえて、(4)におけるレジスターの定義を採用したい。

## 2.2. 短縮レジスター

レジスターの定義として、(4)を受け入れると、短縮レジスターはどのように定義できるだろうか。この疑問に答える前に、まず、先行研究における短縮レジスターの扱いに触れておこう。

短縮レジスターと呼ぶ特殊な文法現象は、その全体もしくは部分が様々な名称の下で研究されてきた。例えば、Quirk et al. (1985) ではブロック言語 (block language)、

Fitzpatrick et al. (1986) では下位言語 (sublanguage)、Haegeman (1997) では短縮レジスター (abbreviated register)、Stowell (2007) では短縮言語 (abbreviated language)、という名称がそれぞれ使われてきた。

そのような研究の中で、ここでは短縮レジスターに関する事実を比較的に広範囲に記述している研究として、Quirk et al. (1985) を取り上げ、短縮レジスターの言語学的特徴と短縮レジスターに含まれると考えられている言語使用場面の範囲を確認する。

Quirk et al. (1985) では、以下のような広範囲に渡る言語使用場面で使われる短縮レジスターを扱う際に、ブロック言語 (block language) という名称を用いている。

- (8)
- Newspaper headlines
  - Personal letters, cables, diaries
  - Instructional writing
  - Informal conversation
  - Broadcast commentaries
  - Dialogue

Quirk et al. (1985) は、ブロック言語を以下のように二種類に分けて説明している。

- (9)
- Simple block language messages are most often nonsentences, consisting of a noun or noun phrase or nominal clause in isolation; no verb is needed, because all else necessary to the understanding of the message is furnished by the context.
  - Some forms of block language have recognizable clause structures. Those forms deviate from regular clause structures in omitting closed-class items of low information value, such as the finite forms of the verb BE and the articles, and other words that may be understood from the context.

(Quirk et al. 1985:845)

まず一種類目には、(9a) で述べられているような単純なブロック言語がある。これについて、Quirk たちは名詞・名詞句・名詞節が単独で使用される場合がほとんどであり、動詞が使用されないのは文脈から補えるからである、と述べている。例えば、(10a) のような公共の標識や (10b) のような店舗で販売促進に用いられる掲示物の表現などがそれに当たる。次に、二種類目は (9b) で述べられている。これに関しては、Quirk たちは、意味的には節構造を持つが、情報量の低い閉鎖語類 (定形の連結詞や冠詞といった機能語) や文脈から理解できる単語を省略しているより複雑なブロック言語であると述べている。この種のブロック言語の例としては、新聞のヘッドライン (cf. 10c)、ハガキやメモ (cf. 10d)、電報 (cf. 10e)、料理のレシピ (cf. 10f)、スポーツの実況中継 (cf. 10g)、日常会話や (小説等の) セリフ (cf. 10h)、日記 (cf. 10i) で用いられる表現などが挙げられている。

- (10)
- Danger: falling rocks
  - Fresh Today
  - SHARE PRICES *ec* NOW HIGHER THAN EVER  
(= SHARE PRICES ARE NOW HIGHER THAN EVER)
  - Weather marvelous. (= The weather is marvelous.)
  - NO MONEY SEND HUNDRED (= I have no money. Send me a hundred dollars.)

- Cook to golden brown.
- Two players wounded.
- Who sent you? – The manager. (= The manager sent me.)
- Got up at six, phoned Bill. Bill said he was ill, so had to cancel meeting. Went to office instead. Worked till 12 on government contract.

では、Quirk et al. (1985) が列挙しているブロック言語下位類の共通点とは何だろうか。それは、標準英語では必須の機能語がブロック言語では脱落している点だと考えられる。そこで、この共通点を取り込んで、本研究では、短縮レジスターを以下のように定義する。

#### (11) 短縮レジスターの定義

標準レジスターにおいては義務的であるような機能語の脱落が許されている、互いに部分的に異なる文法の集合 (the set of partially distinct grammars in which some of the function words that are obligatory in the standard register are dropped)

このように短縮レジスターを定義すると、レジスターの集合を構成する文法のうち、標準レジスター以外の全てのレジスターが短縮レジスターに属するという可能性が出てくる。<sup>5)</sup>

別の言い方をすると、標準レジスターでは許されない機能語が余分に挿入されなければならない「付加レジスター」が存在していない可能性がある。もしこれが正しければ、なぜ人間言語のレジスターの内部構造がこのようなになっているのかを説明する必要が出てくるものと思われる。この点に関しては第 5 章で再び言及する。

### 第 3 章 言語資料について

本研究では、口語英語の短縮レジスターを反映した言語資料として、SMCP 及び母語話者の容認度判断を使用する。それぞれの資料の特徴や資料の取集方法を最初に述べておく。

#### 3.1. 口語英語資料としての SMCP

本研究では、口語英語の資料として、SMCP を使用する。SMCP とは、国際海事機関が英語コミュニケーションに起因する船舶の事故を防ぐために作成した口語英語表現集である。

SMCP では、緊急事態やそれに準ずる状況で使用するため、冠詞や連結詞などの機能語を脱落させる短縮レジスターが幅広く使用されている。<sup>6)</sup>

以下に脱落した要素の種類ごとに SMCP からの例文を挙げる。(各例文最後の《 》内に脱落した要素の種類を示しておいた。)

- (12)
- Where is the fire? – *ec* Fire is on deck. (SMCP: 30)  
《冠詞》 (=Where is the fire? – The fire is on deck.)
  - MV Victor *ec* in critical condition. (SMCP:31) 《連結詞》  
(= MV Victor is in critical condition.)<sup>7)</sup>
  - Has *ec* vessel refloated? – No, *ec* vessel *ec* not refloated yet. (SMCP:85) 《助動詞》  
(= Has the vessel refloated? – No, the vessel has not refloated yet.)

- d. *ec* Ready for the helicopter in 10 minutes. (SMCP:43)  
《一人称単数代名詞+連結詞》  
(= I'm ready for the helicopter in 10 minutes.)
- e. Are there dangers to navigation? – *ec* No dangers to navigation. (SMCP:34) 《There+連結詞》  
(= Are there dangers to navigation? – There're no dangers to navigation.)
- f. *ec* Received your MAYDAY. (SMCP:34)  
《一人称単数代名詞》  
(= I received your MAYDAY.)

SMCP の作成チームは、SMCP を作成するにあたって、船外との VHF 通信や船内業務等で実際に用いられている口語海事英語表現から利用価値の高いものを整理編集したのだが、このような整理編集の過程で、英語母語話者の実際の言語使用を反映していないとみなされる変更も行われた。このことは、編集者自身が、SMCP の序論で述べており、SMCP を口語英語の資料として利用するには注意を払う必要がある。

(13)

- 冒頭にメッセージマーカを付ける。<sup>8)</sup>
- 同音異義語を避ける。
- 縮約形を避ける。
- Yes/No 疑問文に常に省略無しで回答する。
- 一つの文が一つの出来事を表すようにする。
- may, might, should, could, can の使用を避ける。

SMCP と自然言語としての口語海事英語には少なくともこのような違いはあるものの、本研究で注目している連結詞脱落現象について影響を与えているわけではないと考えられるため、SMCP を一種の口語英語コーパスとして利用することは可能だと判断した。<sup>9)</sup>

次に、英語母語話者の内省による資料収集について述べる。

### 3.2. 母語話者による容認度判断

本研究では、標準的アメリカ英語の母語話者である米国人（以下、ネイティブ・コンサルタント）に依頼して、連結詞脱落に関係している例文の容認度を以下のような5段階のスケールで判断してもらった。

(14) 容認度のレベル (level of acceptability)

- [5] PERFCTLY ACCEPTABLE
- [4] ALMOST ACCEPTABLE
- [3] NEUTRAL/CAN'T DECIDE
- [2] ALMOST UNACCEPTABLE
- [1] TOTALLY UNACCEPTABLE

そのような判断を受けた例文を本論文に記載する際には、以下の方針をとった。まず、4 および 5 と判断された例文については、無印とした。また、3 と判断された例文には文頭に??を、さらに 2 および 1 と判断された例文には文頭に\*を、それぞれ付けることとした。

また、本研究に本格的に着手する前に、パイロット・スタディを行い、2名の米国籍の英語母語話者に主要な例文の判断をお願いした。パイロット・スタディにおける容認度判断は本稿で報告している容認度判断と概ね一致していたため、一部を除いて、本稿ではその結果を特に報告しないこととする。

## 第4章 連結詞脱落に課せられた制約

本章では、口語英語における定形の連結詞脱落を支配する制約として、代名詞主語制約と述部名詞句制約を提案する。さらに、これらそれぞれを包含するようなより一般性の高い制約の存在を示唆する。

### 4.1. 代名詞主語制約

まず、代名詞主語制約とは何かについて見ておこう。

- (15) 代名詞主語制約 (Pronominal Subject Constraint)  
代名詞主語を持つ述部の連結詞脱落は許されない。

この代名詞主語制約に関する最初の言及は、SMCP の教科書として出版された大津 (2002) に見ることができる。大津 (2002) には、SMCP の短縮レジスターに関して、次のような説明がある。

(16)

SMCP ではコミュニケーションの効率化のために、日常生活で使われる英語を簡略化し、be 動詞、冠詞、などを省略する傾向がある。(中略) まず be 動詞だが、疑問文の場合には、疑問文であることを明示する目的で、主語に関係なく主語の前に出している。しかし肯定文 (ママ) においては、主語が I や you の場合は be 動詞を抜かしていない。(大津 2002: 5)<sup>10)</sup>

つまり、大津 (2002) の調査によると、SMCP には、平叙文の主語が I や you の場合、連結詞の脱落が適用された例がないということがわかる。

しかし、このような調査はあくまで SMCP という口語英語表現集に対して行われたものであることに注意する必要がある。つまり、大津 (2002) の調査によっても、主語に I や you を持つ述部の連結詞は脱落不可能とまでは言い切れない。SMCP を編集する過程で、たまたまそれらが収集されなかった可能性も検討する必要がある。

さらに、大津 (2002) では代名詞主語として I と you のみを挙げているが、それ以外の代名詞に関しては述べられていない。

そこで、SMCP に記載された例文及び SMCP には記載されていないが口語海事英語として使用可能な例文を作成し、母語話者の容認度判断を仰いだ。

(17) は SMCP からの例で、主語が代名詞以外でかつ連結詞が脱落しているものである。これらが実際に容認可能であるかどうか、及び *ec* に適切な定形の連結詞を挿入できるかどうかを確認したところ、どちらの場合も、すべて容認可能であった。

(17)

- MV Victor {is /*ec*} on fire. (SMCP:30)
- What is on fire? – Cargo {is /*ec*} on fire. (SMCP:79)
- Fire {is /*ec*} on board! (SMCP:80)

次に、一人称単数や二人称の代名詞を含むすべての種類の代名詞を主語とした場合、連結詞脱落が可能かどうかを調査するため、(18) の例文を作成し、容認度の判断を求めた。

- (18)
- I {am /\*ec} on fire. (SMCP:30)
  - We {are /\*ec} on board.
  - Is cargo on fire? – Yes, it {is /\*ec} on fire.
  - Are containers on fire? – Yes, they {are /\*ec} on fire.
  - Is the pilot on board? – Yes, {he/she} {is /\*ec} on board.
  - Am I leaving your radar screen? – Yes, you {are /\*ec} leaving my radar screen.
  - Are we leaving your radar screen? – Yes, you {are /\*ec} leaving our radar screen.

(18)に示された容認度判断から明らかなように、代名詞主語の人称・性・数に関わらず、それに続く定形の連結詞を脱落させることは許されないことが示された。

(17)と(18)の対比より、口語英語では、主語が代名詞の場合、連結詞脱落は許されないという制約が存在する可能性が高まったと言えるであろう。

この結論の傍証として、Zwicky and Pullum (1983)の観察を挙げてもよい。Zwicky and Pullum (1983)は、以下のような対比を示して、彼らの提案する Informal Style Deletion (ISD) という規則が、文の内部では適用できないと述べている。<sup>11)</sup>

- (19)
- You {are/\*ec} awfully happy this morning.
  - {Are/ec} you happy with this idea?

(19b)が示しているように、ISDは文頭の連結詞の削除はできるが、(19a)が示しているように、文の内部では連結詞の削除はできない。このように口語英語の脱落現象に関する先行研究でも、平叙文が代名詞主語を持つ場合、直後の連結詞は削除できないことが示唆されている。

では、このような代名詞主語制約は口語英語特有の制約であろうか。実は、文語である新聞ヘッドライン英語でも同様の制約の存在が報告されている。

Avrutin (1999)では、以下のような対比を示して、新聞ヘッドラインでは主語の位置に代名詞が生起できないと述べている。(以下の例文中に記載してある容認度判定はAvrutin (1999)によるものである。)<sup>12)</sup>

- (20)
- ATTENTION READER! YOU {ARE/\*ec} TO WIN \$1,000,000!
  - YELTSIN APPOINTS HIS DAUGHTER. SHE {IS/\*ec} TO BUILD MARKET ECONOMY
  - TYSON CLAIMS: "I {AM/\*ec} TO WIN!"  
(Avrutin 1999:163)

口語短縮レジスターと文語短縮レジスターの間にこのような共通点が存在することは、口語と文語の両方をまたぐ、より一般的な短縮文法の存在を考察する手がかりになると思われるが、本論文ではこれ以上扱わない。

## 4.2. 述部名詞句制約

次に、連結詞脱落に以下に述べるような述部名詞句制約が関与しているかどうかを検討してみよう。(以下の制約では、度量句 (measure phrase) としての名詞句 (NP<sub>β</sub>) と度量句を除いた名詞句 (NP<sub>α</sub>) という2種類の名詞句が存在していると仮定する。)

### (21) 述部名詞句制約 (Predicate NP Constraint)

述部名詞句を相互に構成素統御している連結詞は脱落させてはならない。ただし、述部名詞句が度量句の場合は、この制約を適用しない。<sup>13)</sup>

まず、SMCPには、標準英語では許されない連結詞脱落が適用されている例が多数存在するのだが、それらすべての述部の範疇を検討してみると、PP、AP、VP<sub>ing</sub>、VP<sub>en</sub>、度量句としての名詞句 (NP<sub>β</sub>) の5種類のどれかであることがわかった。言い換えると、SMCPでは、述部に度量句ではない名詞句 (NP<sub>α</sub>) を持つ文の場合、その連結詞は常に脱落せずに残っている。(22)には連結詞が脱落している例を、(23)には連結詞が残されている例を、それぞれ挙げておく。<sup>14)</sup>

- (22)
- MV Victor [ec [PP on fire]]. (SMCP:30)  
(= MV Victor [is [PP on fire]].)
  - MV Victor [ec [AP aground]]. (SMCP: 31)  
(= MV Victor [is [AP aground]].)
  - MV Victor [ec [VP<sub>ing</sub> proceeding to your assistance]]. (SMCP:32)  
(= MV Victor [is [VP<sub>ing</sub> proceeding to your assistance]].)
  - No ice [ec [VP<sub>en</sub> located in position 56°90'N, 178°13'W]]. (SMCP:38)  
(= No ice [is [VP<sub>en</sub> located in position 56°90'N, 178°13'W]].)
  - What is your present course and speed? – [My present course [ec [NP<sub>β</sub> 183 degrees]]], ec [my speed [ec [NP<sub>β</sub> 16 knots]]]. (SMCP:33)  
(= What is your present course and speed? – [My present course [is [183 degrees]]], and [my speed [is [16 knots]]].)
- (23)
- Is the engine a diesel or a turbine? – The engine [is [NP<sub>α</sub> a diesel]]. (SMCP:60)
  - Can you identify the polluter? – Yes, I can identify the polluter. – Polluter [is [NP<sub>α</sub> MV Victor]]. (SMCP:41)
  - What is your flag state? – My flag state [is [NP<sub>α</sub> Panama]]. (SMCP:47)
  - What is your port of destination? – My port of destination [is [NP<sub>α</sub> Yokohama]]. (SMCP:47)

改めて言うまでもないことだが、NP<sub>α</sub>を相互に構成素統御している連結詞が脱落している例が SMCP には存在しないからといって、英語母語話者がそのような脱落を許していないと直ちに言うことはできない。なぜなら、代名詞主語制約を論じた際に述べたように、SMCPの編者が、口語海事英語表現を整理する際にそのような例を偶然採用しなかった可能性もあるからである。

そこで、(23)から連結詞を脱落させた(24)の容認度を、(22)の容認度と共に、ネイティブ・コンサルタントに判断してもらった。その結果、(24)はすべて容認不可能と判断されたのに対して、(22)はすべて容認可能と判断された。

- (24)
- Is the engine a diesel or a turbine? – \*The engine [ec [NP<sub>α</sub> a diesel]].
  - Can you identify the polluter? – Yes, I can identify the polluter. – \*Polluter [ec [NP<sub>α</sub> MV Victor]].
  - What is your flag state? – \*My flag state [ec [NP<sub>α</sub> Panama]].
  - What is your port of destination? – \*My port of destination [ec [NP<sub>α</sub> Yokohama]].

このように、口語英語レジスターでは、述部に度量句以外の名詞句が現れる場合には、連結詞脱落が許されないとする制約が働いている可能性が大きいことがわかった。

興味深いことに、このような述部名詞句制約もしくはそれに類似する制約が口語英語レジスター以外の連結詞脱落でも働いている可能性がある。以下そのような可能性を異なる領域から4例紹介する。

ただし、以下に紹介する研究では、名詞句を  $NP_\alpha$  と  $NP_\beta$  に分けて論じているわけではない。しかし、それぞれの研究で問題となっている名詞句はすべて度量句以外の名詞句(すなわち、 $NP_\alpha$ )であると判断して良いと考えられる。よって、以下に引用する研究で提案された一般化は、ここでは、 $NP_\alpha$ に関する一般化として扱うことにしたい。これらの研究において、度量句としての名詞句(すなわち、 $NP_\beta$ )がどのように扱われるのかは重要な問題ではあるが、今度の研究課題としたい。では、最初の事例を見てみよう。

Schütze (1997) の容認度判定によると、少なくとも連結詞が主語と述部の  $NP_\alpha$  の同一性を強く求めるような構文の場合、ヘッドラインレジスターでの連結詞脱落は著しい容認度の低下をもたらす。(以下では、連結詞が脱落した場合の容認度判断は Schütze (1997) によるものである。) <sup>15)</sup>

(25)

- a. CHARLES {IS/??ec} [ $NP_\alpha$  FATHER OF MADONNA'S CHILD], PALACE INSIDERS CONFESS
- b. KISSINGER {IS/?\*ec} [ $NP_\alpha$  DEEPTHROAT], TELL-ALL BOOK REVEALS
- c. BART SIMPSON {IS/??ec} [ $NP_\alpha$  THE MURDERER, JURY FINDS

(Schütze 1997: note 20, 198)

第二に、述部名詞句制約に類似した制約がアフリカ系アメリカ人日常英語 (African American Vernacular English, AAVE) の連結詞脱落にも見られる。よく知られているように、AAVE では頻繁に連結詞が脱落する。しかし、Labov (1969) の研究以来、多くの言語学者による研究で、連結詞が脱落する割合が最も低いのが述部に  $NP_\alpha$  を持つ連結詞構文であることがわかってきた。例えば、Labov (1969:732) で報告されているアフリカ系アメリカ人のある若年集団の発話資料に関しては、述部が  $NP_\alpha$  である場合、連結詞は約 70% の文で保持されるのに対し、述部が進行相を表す動詞句である場合は、連結詞の保持率は 30% に過ぎなかった。

第三に、言語習得途上の幼児の中間段階の文法において、連結詞脱落の頻度を述部の範疇ごとに調べた研究である Becker (2001) によると、2歳児の発話データで、連結詞が脱落せずに残っている割合の最も大きい範疇は  $NP_\alpha$  で、約 72% の発話で連結詞が残存していた。一方、述部が場所を表す前置詞句の場合は、約 21% の発話でしか連結詞は残っていなかった。

最後に、一般に手話言語では連結詞が用いられることはないと言われてきたが、Jantunen (2007) によると、フィンランドで使用されている手話である Finnish Sign Language (FinSL) では、 $NP_\alpha$  相当の述部を含む文の場合にほぼ限り、連結詞への文法化の途上と見なされる手話単語(両唇音に似た唇の動きを伴うため  $PI$  と記述される)が主語名詞句と述部の  $NP_\alpha$  の間に随意的に挿入され、 $[NP_{Non-pred} + PI + NP_{Pred}]$  のような連鎖になると言う。

ここで、Jantunen (2007) が  $PI$  を連結詞に分類する可能性があることを主張する理由を見ておこう。

Jantunen (2007) は、 $PI$  が、音声言語における連結詞の典型的な特徴を4点共有していると考えている。すなわち、

(i) 語彙的な内容をほとんど持たない、(ii) 主語名詞句と述部名詞句の連結を行う位置だけに生じる、(iii) 主語名詞句と述部名詞句を交換できるような等価文 (equatives) の場合、 $PI$  はどちらの語順でも生じることが可能であり、どちらかの名詞句の一部となっているわけではない、(iv) 動詞類に属する、の4点である。

さらに、Jantunen (2007) は、 $PI$  が動詞類であることの証拠として、 $PI$  の手話を行うと同時に口が  $[pi]$  に似た動きをすることを挙げている。これは、口の動きを伴う手話は、FinSL では、動詞類に限られる一方で、 $PI$  の前後の単語は名詞類であるため、 $PI$  が動詞類でなければならない、という理由によるとしている。(FinSL で手話を発話する際に、個々の手話単語に対応するフィンランド語の単語を口で真似ることはあるが、 $PI$  の場合は、このケースには当たらない。)

Jantunen (2007) はこのように  $PI$  が連結詞としての属性を持っていると述べているが、現在の FinSL において、 $PI$  が完全な連結詞として機能していると主張しているわけではない。しかし、Jantunen (2007) によるこのような観察は、音声言語の場合であれ、手話言語の場合であれ、連結詞侵入経路の起点が述部の  $NP_\alpha$  であることを示唆している点で興味深い。言い換えると、FinSL における特殊な  $PI$  の存在は、本稿の提案する述部名詞句制約に類似した制約が手話言語にも存在している可能性を示唆していると言える。 <sup>16)</sup>

以上のように、述部名詞句制約またはそれに類する制約が口語英語レジスターにおける連結詞脱落に関与しているだけでなく、ヘッドラインレジスター、AAVE、幼児英語、手話言語にまでその適用範囲が及んでいる点で、非常に重要な制約であると考えられる。すなわち、これらの互いに異質な言語領域に横断的に関わっているこの制約は、人間言語のより深い属性の現れであったとしても決して不思議ではない。本稿ではこの可能性に本格的に踏み込む余裕はないが、第5章で述部名詞制約を帰結として導出できる可能性のある言語類型論からの一般化について触れたい。

## 第5章 まとめと今後の展望

本研究で、我々は英語母語話者による容認度判断と口語英語レジスターを反映していると考えられる SMCP の調査に基づき、口語英語レジスターでは一般に許されているはずの連結詞脱落が許されない環境があることを指摘し、それが代名詞主語制約と述部名詞句制約という二つの形式的な制約に由来していることを示した。

もし口語英語レジスターにおける連結詞脱落の理由を、「緊急を要する事態や限られた時間内での応答などに対応するため、情報伝達に不必要な機能語を削除しているから」とだけ説明するのであれば、なぜ主語が代名詞の時、および述部が度量句でない名詞句の時に連結詞脱落が阻止されるのかが説明できない。したがって、本研究の持つ意義の一つとして、言語を情報伝達の効率性のみで理解しようとする立場には限界があり、言語の形式的な属性も考慮に入れなければ言語の本質が理解できないことを示した点を挙げるができるであろう。

さらに、本研究で提案された二つの制約に関しては、より一般的な原理からの帰結として導出できる可能性があると考えられるため、現段階では極めて不十分な議論になるが、その可能性について触れておきたい。

まず、代名詞主語制約に関しては、本稿では統語的な制約として定式化した。統語制約ではない可能性を示唆するデータも存在する。以下の例を観察されたい。

- (26)
- {Me/\*I}, too. (Schütze 1997:53)
  - {Her/\*She} in New York is what we must avoid.  
(Schütze 1997:53)
  - Who did it? {Me/\*I}. (Schütze 1997:53)
  - {\*Me/\*I} *ec* on fire.<sup>17)</sup>

(26a, 26b, 26c) の例は、それぞれ、主語を残した削除、主語位置に生起する小節、疑問文に対する最小の返答、の例であるが、これらはどれも口語英語レジスターに属する。これらが示すように、口語英語レジスターでは、一般的に、時制を担う動詞が存在しない場合、主語の代名詞が主格の場合は非文となり、対格の場合は容認されることが良く知られている。この差異に対しては、時制を担う要素が存在する場合にのみ主格が与えられ、そのような要素がない場合は、デフォルト格 (default case) が与えられるとする統語的説明が妥当であると思われる。

筆者は、このような差異が、同じ口語英語レジスターの連結詞脱落でも見られるかどうかを調査した。その結果、(26d) で示されているように、口語英語レジスターにおいては、主格の場合はもちろん、対格 (デフォルト格) の場合も、連結詞脱落は許されなかった。この調査結果が示唆していることは、本稿で提案した代名詞主語制約を格付与に関わる統語的原理からは導出できないということであると考えられる。

しかしそうすると、今度は、そもそもなぜ代名詞主語制約のような特殊な制約が存在しているのかという疑問に答えなければならなくなる。現段階では、問題となっている代名詞主語制約は、連結詞の存在とその脱落を前提とした音韻論の制約から導出できるのではないかと考えている。このような考え方をとる理由は次の通りである。まず、2歳前後の英語圏の幼児は、連結詞が脱落したかに見える (27) のような発話をする。(φは大人の文法から見て空所と考えられる位置に挿入した。)

- (27)
- I φ in the kitchen. [Nina 2;1] (Becker 2001:35)
  - Me φ tired. [Naomi 2;0] (Becker 2000:138)
  - Eric φ at Cathy House. [Naomi 2;4] (Becker 2001:35)

一方、大人の口語英語レジスターでは、(28g) のように主語が固有名詞の場合は、連結詞を脱落させられるが、(28e, 28f) のように、主語が主格及び対格の代名詞の場合は、連結詞脱落は許されない。<sup>18)</sup>

- (28)
- {She/MV Victoria} is sinking.
  - She's sinking.
  - ec* 's sinking. (*ec* = She)
  - ec* sinking. (*ec* = She's)
  - \*[CP [TP [D She] *ec* [VP [v sinking]]]]. (*ec* = is)
  - \*[CP [TP [D Her] *ec* [VP [v sinking]]]]. (*ec* = is)
  - [CP [TP [DP MV Victoria] *ec* [VP [v sinking]]]]. (*ec* = is)

このような差異を説明する方法としては、統語論からのアプローチが難しいとすると、音韻論、特に、プロソディの観点からの説明が有効ではないかと考えられる。

まず、2歳前後の幼児の文法では、文を生成する際に、

2語もしくは二つの構成素を結合するだけだとすると、(27) の各文の派生には連結詞の脱落は関わっていない、とみなすことができる。もしそうであるならば、連結詞の脱落がもたらす音韻論的制約が習得済みであったとしてもここでは働かないことになる。<sup>19)</sup>

一方、大人の口語レジスターでは、(28a) のような連結詞を備えた文に基づいて、多様な短縮・脱落表現が生み出されていると仮定してみよう。言うまでもなく、口語レジスターであればどんな短縮や脱落でも許されるわけではなく、(28b, 28c, 28d, 28g) は可能な表現だと見なされるが、(28e, 28f) は許容されることはない。

このような大人の口語英語レジスターの事実を観察すると、どのような一般化やそれに対する説明が見えてくるであろうか。

ここでは、最適性理論 (optimality theory) によりいわゆる左端削除 (left-edge deletion) を説明しようとする Weir (2012) の枠組みを援用してみよう。以下の Weir (2012) による仮定を採用する。まず、名詞句の DP 分析を採用するとともに、主語が弱形代名詞 (weak pronoun) の場合は、限定詞句 (DP) を形成せず、単なる主要部 D であるとする。さらに、この代名詞が韻律構造に変換されても韻律語 (prosodic word, ω) や音韻句 (phonological phrase, φ) にはならず、音節 (syllable, σ) としてのみ機能すると考える。これらに加えて、Weir (2012) に従い、Selkirk (2011) による以下の原理を仮定する。

(29) Prosodic hierarchy (Selkirk 2011)

Utterance  
Intonational Phrase (ι)  
Phonological Phrase (φ)  
Prosodic word (ω)  
Foot (Ft)  
Syllable (σ)

(30) STRONGSTART (Selkirk 2011)

A prosodic constituent optimally begins with a leftmost daughter constituent which is not lower in the prosodic hierarchy than the constituent that immediately follows.

以上の仮定を受け入れ、(28e, 28f, 28g) の統語構造を韻律構造に変換すると、(31a, 32b, 33c) が得られる。

- (31)
- \*[ι [φ (σ She) *ec* [φ (ω sinking)]]].
  - \*[ι [φ (σ Her) *ec* [φ (ω sinking)]]].
  - [ι [φ (φ MV Victor) *ec* [φ (ω sinking)]]].

構造 (31a, 31b) と構造 (31c) の違いは、前者のみが、(30) で定義された STRONGSTART に違反していることである。前者の場合、代名詞主語は音節 (σ) にすぎないため、直後にそれより上位の階層に属する音韻句 (phonological phrase, φ) が続くと、STRONGSTART を破ることになる。一方、後者では、主語は固有名詞であり、音韻句として表示されるため、直後の構成素 (音韻句) より階層が下位になることはなく、STRONGSTART にも違反しない。

言うまでもなく、以上のような Selkirk (2011) や Weir (2012) の最適性理論に基づく説明が正しいかどうかを判定するには今後のさらなる研究が必要である。(ただし、最適性理論による説明が誤りであったとしても、STRONGSTART が捉えようとしている一般化は、音韻部門の制約として残ると思われる。) しかし、もしこのような方向で



の説明が正しいならば、我々が 4.1 で提案した代名詞主語制約のような特殊な統語制約を立てる必要がなくなるだけでなく、左端削除現象を説明する際に用いられるものと同じ原理を使って連結詞脱落も説明できるという好ましい結果が得られる。詳しい議論は省くが、例えば、(28c, 28d) に対応する韻律構造も STRONGSTART には違反しない。このように、プロソディに依拠した説明が正しければ、より深い説明原理を持つ理論の構築に向けて一歩踏み出したことになるであろう。

次に、述部名詞句制約に関しても、筆者は、より一般的な原理からの帰結として導出される可能性があると考えている。このような方向性を強く示唆しているのは、Pustet (2003) による言語類型論の立場からの連結詞の研究である。Pustet (2003) は、自然言語においてどのような条件下で連結詞が現れるのかに関して次のような一般化を提案している。

### (32) 経時安定性に基づく連結詞化の可能性

The higher the time-stability value of a given semantic class, the higher the percentage of copularizing lexemes within this semantic class.

この普遍陳述は、「ある意味類（個体・属性・場所・行為など）が持つ経時安定性（time-stability）が高ければ高いほど、それだけますます、その意味類に属する語句が述部になる際に連結詞を伴う比率も高くなる」という主張をしている。意味類の中で最も経時安定性が高いのは「個体」であり、最も低いのは「行為」および「場所」であり、その中間に「属性」があると考えている。

この経時安定性に基づく制約も、我々の述部名詞句制約も、同一の事象を捉えようとしている可能性が大きい。というのは、「個体」という意味概念と最も結び付きやすい統語範疇が名詞であり、どちらも連結詞が脱落しにくい環境を提供している。またその一方で、「行為」や「場所」という意味と結び付きやすい統語範疇は、ing 形を伴う動詞句や前置詞句ということになるはずで、どちらも連結詞が脱落しやすい環境を提供している。

この一般化と我々の提案との大きな経験的な違いは、

(32) が意味的な基準である経時安定性という意味に基づいているのに対して、述部名詞句制約は名詞句という統語範疇に基づいている点である。もし Pustet (2003) の意味制約が正しいならば、「属性」を表す形容詞の場合であっても、口語英語レジスターで、連結詞脱落に関して差が出てくるかもしれない。というのは、よく知られているように、英語にはより経時安定性の高い形容詞（例えば、tall, high などのいわゆる個体レベル形容詞）とより経時安定性が低い形容詞（例えば、sick, sleepy などのいわゆる局面レベルの形容詞）があるからである。今後、口語英語レジスターでも、経時安定性の高い形容詞句を述部に持つ連結詞の方が、経時安定性の低い形容詞句を述部に持つ形容詞句より、連結詞脱落が起こりにくいというような事実が発見されれば、今回提案した述部名詞句制約が Pustet (2003) の制約から帰結として出てくる可能性がある。

最後に、2.2 で述べたように、もしレジスターを構成する文法集合のうち、標準レジスターを除くすべての文法が (11) で定義した短縮レジスターで構成されているとしたら、なぜレジスターがこのような構造を持っているのかを説明する必要が出てくる。言い換えると、(11) を採用すると、これまで一枚岩だと考えられてきた I-言語が、実は、一つの標準レジスターと複数の短縮レジスターからでき

ていることになるため、このような I-言語の内部構造をより良く説明できる言語理論が必要となってくる。

ここで一つの仮説を立ててみよう。「言語習得途上で通過した中間段階の文法が、安定状態の文法とともに、成人母語話者の I-言語の一部として残存しており、成人母語話者が何らかの理由で標準レジスターでは扱えない短縮表現を必要とした場合には、それにアクセスして利用することができる」としたらどうであろうか。この仮説は現段階では研究の方向性を示したものに過ぎないので、今後、細部を明示し、反証可能性を高める必要があることは言うまでもない。本稿で取り上げた連結詞脱落に関しては、大人の連結詞脱落が幼児の文法の同様の現象を参照し、利用している可能性があると思われる。<sup>20)</sup>

しかし、その場合でも、大人は幼児の文法をすべてそのまま利用するのではなく、例えば、統語的には幼児期の文法を何らかの形で利用するが、音韻論的には大人の制約に従っているという可能性もあるだろう。このように、上記の仮説を具体化するためには、あらゆる可能性を考慮して詳細を詰めていく必要がある。

このような中間段階の文法に言及する説明が正しければ、なぜレジスター文法が、標準レジスターから機能語を脱落させた短縮レジスターのみによって構成されているのか、なぜ 2 歳児の文法が大人の短縮レジスターに似ているのか、などの疑問に説明の道が開かれる可能性があるが、その当否は今後の研究に委ねなければならない。<sup>21)</sup>

### (注)

- 1) 例文中の [ ] 内左端の記号は問題としている連結詞が構成素統御 (c-command) する句の範疇を表す。また、名詞句・形容詞句・(過去分詞を主要部とする) 動詞句・(現在分詞を主要部とする) 動詞句・前置詞句を、それぞれ、NP・AP・VPen・VPing・PP と表すことにする。さらに、連結詞を、名詞句・形容詞句・前置詞句などが後続する be 動詞だけでなく、進行相・受動態を形成する助動詞としての be 動詞をも含む名称として使用する。この連結詞の拡張用法は単なる便宜上のものでなく、理論的な主張を含むものであるが、この点に関しては稿を改める必要がある。
- 2) 短縮レジスターの適用された例文の下に、必要に応じて、それを標準英語に書き換えた例を記載する。
- 3) 英語のインフォーマルなレジスターにおける主語代名詞脱落は、Roepfer (1999) の観察とは異なり、虚辞の it が主語の場合だけでなく、全ての代名詞主語で生じる。さらに、Napoli (1982)、Zwicky and Pullum (1983)、Weir (2012) は、このような代名詞主語脱落が、主節の左端に生起する弱形音節が削除される音韻論的現象として扱う必要があるとする十分な証拠を提示している。したがって、Roepfer (1999) の主張するように、英語のインフォーマルなレジスターにおける主語脱落現象をイタリア語の場合のような統語的現象として扱うことには無理があると思われる。このようなわけで、Roepfer (1999) の分析には修正を要する点はあるが、多重文法理論の根幹にある仮説、すなわち、大人の母語話者の言語知識に複数の異なる文法が共存しているとする仮説自体は、依然として考慮に値するものであると思われる。
- 4) パリンプセストとは、元々は、その上で文字を何度も書いたり消したりを繰り返した羊皮紙のことである。

このような羊皮紙は、適切な技術を用いれば、何層にも重なった過去の筆跡を復元することができる。また、もし I-言語が実際にパリンプセストのような構造を持っているのであれば、なぜそうなっているのかを説明できる言語理論が望ましいことはいまでもない。

- 5) ただし、現在進行中の言語変化により母語話者によっては、一般的に許されない機能語の出現が許される文法を保持している場合もある。例えば、Bolinger (1987) や Massam (2013, 2017) などで指摘されているように、連結詞 *is* が標準的な英文法では許されない位置に出現する二重連結詞構文 (double copula constructions) を許容する母語話者が存在している。

(i) One of the realities is, *is* that we have hit the wall with respect to spending. (Massam 2013)

このような埋入的な *be* 動詞の存在を考慮に入れるならば、(11) における「標準レジスター」の定義を、動的文法理論 (dynamic model of grammar) の枠組みを用いて、「特定の母語話者の持つ最も拡張の進んだ段階の文法」とすることが必要であろう。

- 6) SMCP の序論では、ブロック言語が適用されている口語表現を意図的に選んだという趣旨の説明がある。
- 7) 実際の SMCP では、(12b) は次のように書かれている。

(i) MV... in critical condition.

この文中の「...」で示されている部分は、変項を示しており、それぞれの例文にふさわしい表現が入る。(i) の場合は、船名が入ることになる。以後本稿では、そのような変項に代入するのにふさわしい表現を適宜書き込んでおくことにする。また、書き込まれた表現がどれかを明示するため破線による表示を行う。最後に、口語海事英語では、動力船の名称は、Motor Vessel (MV と省略) で始めることになっている。

- 8) メッセージマーカ (message markers) とは、SMCP で定められた、いわば発話内効力 (illocutionary force) を言語化したもので、各発話の発話内効力に応じて、8 種類のメッセージマーカ (INSTRUCTION, ADVICE, WARNING, INFORMATION, QUESTION, ANSWER, REQUEST, INTENTION) から適切なものを選んで、文頭で使うことが求められている。例えば、法的規制力を持ったメッセージの前には、INSTRUCTOIN というメッセージマーカを挿入することが望ましいとされている。

(i) INSTRUCTION. Do not cross the fairway.

- 9) SMCP が従っている短縮レジスターと口語英語の短縮レジスターが実質的に同じ文法であることは、言語習得という観点から見ても、自然なことであろう。SMCP に収録された文を実際に発話している母語話者自身、船舶職員になるべく実習生としての訓練を行なっている期間に、船舶運航上必要な特殊語彙や定型句を学ぶ必要はあるが、機能語の脱落に関する規則を学ぶわけではない。そもそも訓練を担当する教員自身が機能語脱落を支配する規則を自覚している可能性は極めて低い。つまり、実習生には特殊な短縮レジスターを学習する機会が一切与えられていないと言える。従って、すべての船舶職員は、自分が日常生活で使用している短縮レジスターを、必要に応じて、無意識のうちに船上で使用しているだけであると考えられる。

- 10) 引用された文章内の「肯定文」は、少なくとも、「平叙文」とすべきだと思われる。これは、SMCP には、連結詞脱落の可能性が、主語が代名詞か固有名詞かで左右されることを示唆する否定の平叙文が記載されて

いることからもうかがい知れる。(…は船名を示す。)

(i) I am/ MV... not under command.

(SMCP:31)

すなわち、連結詞脱落で問題となるのは肯定・否定の区別ではないと考えられる。ただし、口語英語の文中での連結詞脱落に関しては、「平叙文」としたとしても、正しい一般化が述べられたことにはならない。主語が *wh* で始まる (ii) のような疑問文であれば、連結詞の脱落が許されることがすでに Zwicky and Pullum (1983) において報告されている。

(ii) Who {are/ec} you taking Paris with you?

(Zwicky and Pullum 1983:159)

また、口語英語の文中における連結詞脱落には、本論文で取り上げた 2 種類の制約以外に、(i) 現在時制であること、(ii) 主文であること、などの制約が課せられている可能性が高いが、詳細は今後の研究で明らかにしたい。

- 11) ISD が捉えようとする現象を、Napoli (1982) は頭位資料削除 (initial material deletion)、Weir (2012) は左端削除 (left-edge deletion) と呼んでいる。
- 12) 筆者のネイティブ・コンサルタントは、(20a) と (20b) に関しては、Avrutin (1999) の判定を追認し、連結詞脱落は非文を生み出すとした。しかし、(20c) に関しては、そもそも I AM TO WIN 自体の容認度が低いとし、連結詞のある場合も、ない場合も非文と判定した。
- 13) 句構造上、A と B が互いに相手を支配せず、A を支配する最初の枝別れ節点が B をも支配する時、A が B を構成素統御 (c-command) するという。A と B が構造上姉妹関係にある時、A と B は互いに相手を構成素統御する。また、述部名詞句を、標準英語で連結詞を相互に構成素統御している名詞句全般の意味で使用する。従って、述部名詞句は、いわゆる述語名詞表現 (predicate nominal) のみを指しているわけではない。述部名詞句制約がなぜ述部名詞句が度量句の場合に働かないのかに関しては、現段階では不明だが、SMCP での例を調査する限りでは、度量句の指示する数値は、時間とともに容易に変化するもののみであった。これが第 5 章で示唆した経時安定性と関係しているかどうかについては、今後の研究課題としたい。
- 14) 述部名詞句が NP<sub>β</sub> の場合、連結詞が脱落している例として、SMCP から二例追加しておく。
- (i) Report distribution of cargo.
- No. 5 hold [ec [NP<sub>β</sub> 2 tonnes]].
  - Deck cargo forward [ec [NP<sub>β</sub> 3 tonnes]].
  - Forepeak [ec [NP<sub>β</sub> 3 tonnes]].
  - No. 4 double bottom tank [ec [NP<sub>β</sub> 5 tonnes]].
- (SMCP:85)
- (= Report distribution of cargo.
- No. 5 hold [is [NP<sub>β</sub> 2 tonnes]].
  - Deck cargo forward [is [NP<sub>β</sub> 3 tonnes]].
  - Forepeak [is [NP<sub>β</sub> 3 tonnes]].
  - No. 4 double bottom tank [is [NP<sub>β</sub> 5 tonnes]].)
- (ii) What is depth of water?
- Greatest depth [ec [NP<sub>β</sub> 35 meters] port side aft].
- (SMCP:84)
- (= What is depth of water?
- Greatest depth [is [NP<sub>β</sub> 35 meters] port side aft].)
- 15) 筆者のネイティブ・コンサルタントによると、(25) の例に連結詞脱落を適用すると、完全に非文になるとのことだった。例文から判断すると、Higgins (1978) に

よる連結詞構文の分類では指定文 (specificational sentence) に属するような文の場合に、連結詞脱落が阻止されると Schütze (1997) は考えていると思われる。また、ネイティブ・コンサルタントは Schütze (1997) が容認可能とした (i) に対して、容認不可能との判断を下した。

(i) NIXON *ec* A CROOK, DEMOCRATES ARGUE

これは、短縮レジスターの適用に関して、母語話者の間に個人差があることを示していると考えられる。この揺れの存在がより大規模な調査で確認できれば、

(25) のような指定文では母語話者間で判断にほぼ揺れがなかったのに、(i) のような措定文 (predicational sentence) では母語話者の判断に揺れが生じるのはなぜなのかを説明する必要が出てくると思われる。

- 16) Jantunen (2007) によると、連結詞の属性を部分的に持つ手話単語 (PI と表記) は、それに形態 (すなわち、手や指の使い方) が酷似している別の手話単語、AITO 'real' 及び KYLLÄ 'yes', が存在する。また、連結詞 PI は、'that is', 'that precisely', 'expressly' のような意味を持ち、主語と述部の両名詞句の同一指示性を強調する役割があるとの直感を持つ母語話者もいるとのことである。
- 17) 主語が代名詞の場合、それが対格であれ、主格であれ、口語英語レジスターでは、述部の連結詞脱落が許されないことは、パイロット・スタディーにおいて容認度判断をお願いした二人の英語母語話者によっても確認されている。
- 18) ただし、幼児の場合は、構造格というシステムを習得しておらず、単に、I と me という音形と自己言及という意味とを結びつけているだけであると考えられる。
- 19) 2歳前後の幼児の文法として、文に小節 (small clause) 構造のみを与えることを提案している研究には、Radford (1990) などがある。また、大人の短縮レジスターにおける連結詞脱落構文に小節構造を与えると提案するには、Progovac (2006) などがある。これらの研究における小節構造は、実質的に、2語もしくは二つの構成素を結合しただけの構造と見ることができる。例えば、Progovac (2006) の John tall?! の構造は、以下のようになっている。
- (i) [AP [John] [A' [A tall]]]?!
- 20) 大人の文法が子供の文法を利用している可能性に関しては、注 19 を参照のこと。
- 21) このような方向での説明を目指す場合には、大人の文法を説明する際に、言語習得の過程に言及することを許すような言語理論が望ましい。そのような言語理論として、動的な文法理論が挙げられる。動的な文法理論については、Kajita (1977, 1997)、梶田 (2004) 等を参照されたい。また、大人の文法が、子供の文法からの展開により、その可能性の範囲が決められているという動的な文法理論の主張を支持する証拠として、本稿で取り上げた STRONGSTART を挙げることができるかもしれない。Gerken (1991) は、実験により、2歳頃の子供の文法で、弱強型韻脚 (iambic foot) から弱音節を省くような発話をするのを確認するとともに、この時期の文法では、強弱型韻脚 (trochaic foot) が型として発話生成を規制しているという仮説を立てている。この韻律型により、例えば、子供は giRAFF を RAFF と発話する傾向があるが、MONkey は MON と発話することは少ないことが説明できる。このような1語文の韻律型が基体となり、徐々にその型の適用範囲を拡張し、

最終的に、STRONGSTART が捉えようとしている制約が生じた可能性もあるが、詳細は今後の研究に委ねたい。

## 謝辞

本稿は、2015年11月に開催された日本英語学会第33回大会 (於 関西外国語大学) において口頭発表した「Category-Sensitivity in Copularization: A Dynamic View」及び、2017年9月に開催された青山英語英文学研究会において口頭発表した「Copula Absence Phenomena and their Relation to the Initial State of the Faculty of Language」の内容の一部に大幅な加筆・修正を施したものである。これらの口頭発表をお聞きいただいた方々から多くの貴重な質問やコメントをいただいた。特に、小川芳樹先生、中澤和夫先生、高橋将一先生、野村忠央先生、蔵藤健雄先生には、本研究にとって重要な質問やコメントをいただいた。ここに記して感謝したい。梶田優先生には、東京言語研究所における一連の講義を通じて、重要な研究遂行上の示唆をいただいた。また、今西典子先生には、動的な文法理論を進展させるという研究の方向性について、有益な示唆をいただいた。ここに記して、心からの謝意を表したい。本稿の2名の査読者の方々からは、詳細かつ有意義なコメント・質問をいただき、内容・形式の両面で改善を図ることができた。さらに、英語語法文法学会の会員の方々数名にも、この論文の元となった未発表原稿を読んでいただき、貴重なコメント・質問をいただいた。これらの多くの方々への感謝の意を表したい。また、Brenna Johnson さんには、本研究を遂行するにあたって、多数の例文の容認度判断に多くの時間を割いていただいた。また、この研究のパイロット・スタディの段階で、Marissa Lowes さん、Jenny Wilder さんには、主要な例文の容認度判断をお願いした。ここに記して感謝したい。なお、本稿における不備の責任がすべて筆者にあることは言うまでもない。本研究は、JSPS 科研費 JP19K00683, JP 24520533 の助成を受けたものである。

## 参考文献

- Avrutin, S. 1999. *Development of the Syntax-Discourse Interface*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Becker, M. 2000. *The Development of the Copula in Child English: The Lightness of Be*. Doctoral Dissertation. University of California, Los Angeles.
- Becker, M. 2001. "The syntactic structure of predicatives: clues from the omission of the copula in child English." *ZAS Papers in Linguistics* 22, 25-42.
- Biber, D. 1995. *Dimensions of Register Variation: A Cross-Linguistic Companion*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bolinger, D. 1987. "The remarkable double IS." *English Today* 9, 39-40.
- Fitzpatrick, E. et al. 1986. "The status of telegraphic sublanguages." In R. Grisham and R. Kittredge eds., *Analyzing Language in Restricted Domains: Sublanguage Description and Processing*, 39-51. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates.
- Gerken, L. 1991. "The metrical basis for children's subjectless sentences." *Journal of Memory and Language* 30, 431-451.
- Haegeman, L. 1997. "Register variation, truncation, and subject omission in English and French." *Journal of English Language and Linguistics* 1(2), 233-270.
- Higgins, R. F. 1979. *The Pseudo-cleft Construction in English*.

- New York: Garland.
- Jackendoff, R and E. Wittenberg. 2014. "What you can say without syntax: a hierarchy of grammatical complexity." In F. Newmeyer & L. Preston, eds., *Measuring grammatical complexity*, 65–82. Oxford: Oxford University Press.
- Jantunen, T. 2007. "The equative sentence in Finnish Sign Language." *Sign Language and Linguistics* 10(2), 113-143.
- Kajita, M. 1977. "Towards a dynamic model of syntax." *Studies in English Linguistics* 5, 44-76.
- Kajita, M. 1997. "Some foundational postulates for the dynamic theories of language." In M. Ukaji, et al. eds., *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eightieth Birthday*, 378-393. Tokyo: Taishukan.
- 梶田優. 2004. 「<周辺><例外>は周辺・例外か」『日本語文法』4巻・2号, 3-23.
- Labov, W. 1969. "Contraction, deletion, and inherent variability of the English copula." *Language* 45, 715–762.
- Massam, D. 2013. "Intrusive *be* constructions in (spoken) English: apposition and beyond." In S. Luo ed., *Proceedings of the 2013 annual conference of the Canadian Linguistic Association*.
- Massam, D. 2017. "Extra *be*: the syntax of shared shell-noun constructions in English." *Language* 93, 121-152.
- Napoli, D. J. 1982. "Initial material deletion in English." *Glossa* 16, 85-111.
- 大津皓平 (編) 2002. 『海事基礎英語』東京: 海文堂出版.
- Paesani, K. 2006. "Extending the nonsentential analysis: the case of special registers." In L. Progovac, et al. eds., *The Syntax of Nonsententials: Multidisciplinary Perspective*, 147-182. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Progovac, L. 2006. "The syntax of nonsententials: small clauses and phrases at the root." In L. Progovac, et al. eds., *The Syntax of Nonsententials: Multidisciplinary Perspectives*, 33–71. Amsterdam: John Benjamins.
- Pustet, R. 2003. *Copulas: Universals in the Categorization of the Lexicon*. Oxford: Oxford University Press.
- Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Radford, A. 1990. *Syntactic Theory and the Acquisition of English Syntax: The Nature of Early Child Grammar of English*. Oxford: Blackwell.
- Roeper, T. 1999. "Universal bilingualism." *Frontiers in Psychology* 7, 1-14.
- Roeper, T. 2016. "Multiple grammars and the logic of learnability in second language acquisition." *Bilingualism: Language and Cognition* 2(3), 169-186.
- Romaine, S. 2000. *Language in Society: An Introduction to Sociolinguistics (2nd edition)*. Oxford: Oxford University Press.
- Schütze, C. 1997. *INFL in Child and Adult Language: Agreement, Case and Licensing*. Doctoral Dissertation. Massachusetts Institute of Technology.
- Selkirk, E. 2011. "The syntax-phonology interface." In J. Goldsmith, et al. eds., *The Handbook of Phonological Theory*, 2nd edition, 435-484. Wiley-Blackwell.
- Stowell, T. 2007. "Abbreviated language: the grammar of Abbreviated English in headlines, instructions, and diaries." Paper presented at Marschak Colloquium, UCLA, November 2, 2007.
- Trudgill, P. 2000. *Sociolinguistics: An Introduction to Language and Society*. (4th edition). London: Penguin Books.
- Wardhaugh, R. and J. M. Fuller. 2015. *An Introduction to Sociolinguistics (7th edition)*. Oxford: Wiley Blackwell.
- Weir, A. 2012. "Left-edge deletion in English and subject omission in diaries." *English Language and Linguistics* 16(1), 105-129.
- Zwicky, A. and G. K. Pullum. 1983. "Deleting named morphemes." *Lingua* 59, 155-175.

## 言語資料

*Standard Marine Communication Phrases (SMCP)*. 2002.  
([http://www.imo.org/en/KnowledgeCentre/IndexofIMOResolutions/Assembly/Documents/A.918\(22\).pdf](http://www.imo.org/en/KnowledgeCentre/IndexofIMOResolutions/Assembly/Documents/A.918(22).pdf))

## 口語英語における連結詞脱落に課せられた制約

藤 正明\*

(\* 東京海洋大学学術研究院海事システム工学部門)

口語英語において、文中に生起する定形の連結詞は脱落する傾向にある。この現象は、通常、簡潔さを求める情報伝達上の要請に起因すると考えられている。本論文は、コミュニケーション上の簡潔性が損なわれるような効果を持つ、連結詞脱落に課せられた形式的な制約が存在していることを示す。より具体的に述べると、本論文の主な目的は、文中に生起する定形の連結詞の分布が、口語英語において、少なくとも2種類の制約(すなわち、主語に関する制約と述部に関する制約)により規制されていることを論証することである。さらに、これらの制約をより一般的な原理から導出する可能性が論じられる。

キーワード: 口語英語、文中連結詞脱落、短縮レジスター、動的文法理論、SMCP